

論文

ルソーの体系概念

浅見 臨太郎*

はじめに

本論文は、J.J. ルソー（1712–1778）の体系（système）概念の多様な意味内容を分析し、とくに晩年の自伝作品執筆時代における同概念のルソー的特質を明らかにすることを目的とする。本論文は比較思想・比較文学の方法論によってルソーのテキストを分析する。すなわち、ルソーの思想的出発点となった同時代の文脈を考慮し、百科全書派の形而上学批判との比較によってルソーの文学的・思想的営為の特質を明らかにするのである。このような観点からルソーのテキストを読み直すと、本論文が焦点を合わせる体系概念のうちに、『百科全書』の幾つかの箇所ではダランベールとディドロが表明したデカルト主義の演繹論への批判、換言すれば形而上学への批判との錯綜した思想的関係性のなかでルソーが確立していった独自性の一端を見出すことができる。

ルソーは、未出版の遺稿、および私的なもの、公刊を前提としたものを問わず書簡までも含めて膨大な数のテキストを残したが、本論文ではその代表作に数えられる『エミール』と『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』を主として扱

う。その理由は、当該テキストを実際に分析するにあたり後述する。

本論文の問題意識を述べる前に、ルソー研究の学説史を簡潔に確認しておきたい。フランス語圏を中心としたヨーロッパでは、ルソー没後の比較的早い時期からルソー研究・ルソー解釈が蓄積されてきた。例えばルソーの個人的なゴシップ的話題に言及したものから、フランス革命期の新聞記事に至るまで文字通り枚挙に暇がないが、20世紀初頭から今日にまで続くルソー研究の水準に決定的な影響を与えたのは、E. カッシーラーのルソー解釈である。カッシーラーは、1932年に発表した『ジャン＝ジャック・ルソー問題』（原題 *Das problem Jean-Jacques Rousseau*）において、ルソーの思想の「内的法則」をテキストの綿密な読解を通じて問題にしたことで、19世紀に支配的であった、フランス革命の帰結であるジャコバニズムの恐怖政治の原因をルソーの一般意思論に短絡的に結びつけるようなタイプのルソー解釈を学問的に批判する方法を提示したのである。カッシーラーは、ルソー研究者でさえも整合的な解釈を放棄するような様々なアポリア、例えば『人間不平等論』と『社会契約論』における自由論の矛盾

* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程4年（指導教員 池田雅之）

等をルソーの思考の混乱と考えず、むしろルソーの体系のうちに近代の政治社会や哲学的言説が必然的に抱え込む難問を読みとったといえよう。

すでに古典的研究としてしばしば言及されるR. ドゥラテの『ルソーとその時代の政治学』やJ. スタロバンスキーの『透明と障害』といった20世紀後半のいくつかのルソー読解も、ルソーの複雑なテキストを歴史や政治に安易に結びつけず、まずはテキストそのものを内在的に読むという姿勢において、基本的にはカッシーラーの方法論を踏襲している。ルソー自身も、その文学的営為の体系的・一貫性を繰り返し主張していた。しかし、ルソーの多様なテキスト群を、カッシーラー以降暗黙の前提とされた「一貫性」という視点から、無批判に体系的に解釈することにも問題がある。なぜなら、カッシーラーがすでに指摘しているように⁽¹⁾、ルソーはまた、首尾一貫した実証的命題のみが哲学的、学問的な価値を有するという近代西洋の科学観、合理主義を批判した文学者でもあったからである。

桑瀬章二郎は、以上のようなルソー研究史の概況について、多くの研究者がルソーの主張する体系的統一性に安易に同調する傾向にあることを批判的に論じている⁽²⁾。本論文の議論は桑瀬の論旨を前提として、百科全書派との論争的文脈や自己語りのレトリック分析に比重を置いた桑瀬の論文においては不十分だった、systèmeという語の語義そのものをより綿密に分析することで、ルソーの体系概念および体系概念批判の複雑な内実を明らかにすることを目的とする。そのためにもまず、第一節と第二節において、ルソーの生きた18世紀フランス啓蒙

主義の科学論を考察し、ルソーのテキストを分析する予備的作業とする。

1. 啓蒙の世紀における体系概念

カッシーラーは18世紀啓蒙主義を以下のよう

に的確に要約している。

まず啓蒙主義はイギリスとフランスにおいて、哲学的認識の在来形式である形而上学的体系形式を破壊することから始めた。もはや啓蒙主義は「体系の精神」の権能と有効性を信じてはいなかった。啓蒙主義はこれを哲学的理性の強みではなくて、むしろその束縛であり障害であると見てとった。だが啓蒙主義はこの「体系の精神 esprit de système」を断念しそれを意識的に退けはしたけれども、決して「体系の精神 esprit systématique」を捨て去ったわけではない。むしろ啓蒙主義は新しい、もっと効果的なやりかたでこの精神を発揮し強化しようと試みる⁽³⁾。

カッシーラーによれば、デカルトやスピノザ、マルブランシュに代表される17世紀の哲学は、「哲学的認識の本来の課題を哲学的「体系」の構築」と考え、真理についての唯一可能な記述は「厳密な体系的導出」のみであるとした。対して18世紀哲学は、このような17世紀的なタイプの原理からの命題の演繹方法すなわち「体系的な導出と論証の方法」を放棄し、自然科学を範型として現象から原理を導くように努めたという⁽⁴⁾。啓蒙主義が推進しようとした哲学は、原理や法則性を現象に先行するアприオリな規則ではなく、むしろ観察によって獲得される目的と規定した。それゆえに百科全書派に

として体系という概念は、偏見に囚われた古い時代の形而上学を温存するものとして批判の対象になったのである。

次節では、『百科全書』のいくつかの重要なテキストの分析を通じて、上記のようなカッシーラーの啓蒙主義時代の科学論解釈の妥当性を確認しつつ、18世紀中葉のフランス啓蒙主義における典型的な体系概念理解を論じたい。

2. 体系的精神と体系の精神——百科全書派の形而上学批判

ディドロとダランベールによって実現された『百科全書』が18世紀フランス啓蒙主義の金字塔であり、またその思想的典型でもあるということは多くの研究者の意見が一致するところである。20世紀に膨大な研究が蓄積され、今日では『百科全書』の多くの項目の執筆者が特定されている。各項目の内容も詳細に論じられ、相互に矛盾する記述の解釈や執筆者が参照した文献までもが研究されている現在、アカデミーに席を置く者から在野の科学者、果ては編集者のディドロですら知らない無名の文学者まで多くの書き手が寄稿した『百科全書』の内容を要約することは不可能だが、この膨大な書物を貫く精神が「実証主義」と「科学による人類の文明の進歩への信頼」であるということは確かであろう。その巻頭にダランベールが極めて重要な序論を寄せており、体系について次のように述べている。

実際、一つの学問の原理の数を減らすほどそれだけ、その原理をより広く適用できる。というのは、一つの学問の対象は必然的に限定されているので、その対象に適用される原理

は少数になるほどそれだけ実り豊かなものになるだろうから。この原理の還元が、何よりもそれによってこれらの原理が把握しやすくなるのだが、真の体系的精神 (*le véritable esprit systématique*) を構成する。この体系的精神を、これと常に一致するとは限らない体系の精神 (*l'esprit de système*) と取り違えないよう十分に警戒しなければならない⁽⁵⁾。

『百科全書』が企画された18世紀中葉のフランスの文脈において、ディドロとダランベールが問題視した「体系」は何よりもまずデカルト主義を意味した。例えば、コンディヤックを経由してロックの感覚論哲学が当時のフランスの知的世界で興隆を極めたのは——『百科全書』の項目「哲学」においてディドロはロックの哲学を賛美している——、心身論を中心としたデカルト主義の議論を批判する文脈においてであり、ディドロがベーコンの実験主義に依拠したのも同じ問題意識からであった。ダランベールとディドロにとって、原理から命題を演繹していくだけの哲学は学問ではなく、観察と実験を欠いた形而上学だった。ダランベールと同様にディドロも「体系的精神」を厳しく批判している。

二つの主要な障害が哲学の進歩を長い間遅らせているが、それは権威と体系的精神 (*l'esprit systématique*) である⁽⁶⁾。

ダランベールは「序論」の先に引用した文とは異なる箇所で「実際のところ、一つの学問とは何か。諸規則の体系あるいは何かある対象に関係する諸事実の体系ではないだろうか⁽⁷⁾。」

とも述べており、ディドロとは微妙に異なる学問観・体系概念を抱いていたようである。それゆえのことか、ダランベールはle esprit systématiqueを肯定的、l'esprit de systèmeを批判的に使用し、ディドロはle esprit systématiqueを批判しているという点において両者には術語の差異がある。両者の体系概念の差異も思想的に興味深い、本論文の議論においては、フランス啓蒙主義の金字塔である『百科全書』の編集を牽引した二人が、デカルト主義に代表される体系性への批判を共有していたことが確認できれば充分である。

ディドロは先の引用箇所が続いて「体系的精神」の特徴を次のように述べる。

体系的精神も〔権威〕に劣らず真理の進歩を阻害するものである。体系的精神ということでは私は、それこそ真の哲学的精神にほかならないのだが、真理を相互に結びつけて論証するような精神を意味しているのではない。そうではなく、あらかじめ設計図を引いて宇宙の諸体系を構成し、続いてこれに現象を、自ら進んであるいは強いられて、適合させようとするような精神を示しているのである⁽⁸⁾。

ディドロが批判する体系的精神とは、自然世界の現象の厳密な観察から原理を導出するのではなく、その反対に観察者の前提とする原理に適合するように現象を整合的に解釈する姿勢のことである。F. ベーコン由来の実証主義に沿って⁽⁹⁾原理に対する現象の先行性を強調するこのディドロの記述は、先のカッシーラーの啓蒙主義理解とも合致している。

以上のように、ダランベールとディドロが

「体系」、**「体系的」**という言葉のうちに、観察と実験による実証を軽視するような否定的な意味合いを読み取っていたことが明らかになった。続いて、『百科全書』における体系概念のより具体的な内包的意味を確認する。

『百科全書』には「体系」という項目が単独で設けられている。この項目はコンディヤックの『体系論』冒頭の議論を要約したものとしてよく知られており、全体が五つの内容に分節化されている。そのうち本稿の主題にもっとも関係のある第一節「形而上学」の記述を取り上げよう。『百科全書』において「体系」は以下のように定義される。

体系とは、技術や学問の様々な部分が互いに支え合い、また最後の部分が最初の部分によって説明されるような状態にある、それら部分の配置に他ならない⁽¹⁰⁾。

学問や技術の全体において相互に有意味に関係し合うような、部分の有機的な関係性が「体系」である⁽¹¹⁾。この項目——というよりもむしろコンディヤック——によれば、体系はそれを支える学問上の原理、方法論にそって三種類に分類できるという。そのうち『百科全書』が唯一肯定的に支持している第三種の「体系」に関する記述を取りあげよう。

哲学者の著作には、三種類の原理があることが認められるが、そこから三種類の体系が形成される。(中略) 第三の種類の原理とは、経験によって獲得された事実、経験によって調べられ確認された事実⁽¹²⁾に他ならない。真の体系が基礎をもつのはこの第三の種類の原理

の上であって、ただそれだけが体系という名をもつに値するのである⁽¹²⁾。

この項目も、先に確認したダランベール・ディドロと同様に観察を重んずる実証主義的傾向を示している。続いてこの項目の執筆者はこの「第三の種類の体系」を次のように説明している。

人が体系について有すべき唯一の考えによれば、いくつかの抽象的な原理をもとに自然を説明しようとする著作を、不当にもそれを体系と呼んでいるにすぎないということとは明らかである。(中略) 真の体系 (les vrais systèmes) とは、事実に基礎をもつ体系である。しかし現象のつながりを知ることができるためには、この体系は非常に多くの観察 (observations) を必要とする⁽¹³⁾。

抽象的な原理から自然を解釈せず、あくまで現象の観察によって実証される諸事実に基礎づけられた命題と知識の有機的な全体こそが『百科全書』という書物における理想の体系、「真の体系」なのである。このように、事実の観察によって基礎づけられていない体系を批判し、自然科学をモデルにした実証主義的な体系を評価するという点に関しては、基本的に『百科全書』の記述に矛盾はなく、カッシーラーの啓蒙主義解釈も妥当なものと考えられる。以上の『百科全書』の叙述をフランス啓蒙主義における「体系」概念の議論の典型として、次節ではルソーのテキストの分析に進みたい。

3. ルソーの体系概念

本節では、ルソーの代表作の一つである『エミール』を分析する。数あるルソーのテキストのなかから『エミール』を取り上げる理由は、第一にこの作品がルソーが百科全書派と決定的に袂を別った時期に集中的に執筆された著作であること⁽¹⁴⁾、第二に1750年代末から1760年代にかけてのルソーの主要テキストのうちで「体系」という語の使用回数が多くかつその意味内容も多岐にわたること、第三に次節で分析する1770年代の自伝的作品である『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』において『エミール』が自身の代表作であると述懐されており、両作品のテキストの水準での関係性が明らかだということである。以上三点を根拠として、『百科全書』とルソーの体系概念を比較しつつ、本稿の目的である自伝テキストについての次節での議論を明確にするためには、『エミール』が最も適切なテキストであると考えられる。

さて、『エミール』における体系概念は、その語義・語法にしたがって以下の四つに分類できる。第一に、自然世界の存在の全体性を記述するもの、第二におそらくは第一の意味の体系概念から派生して、人間社会をシステムとして記述するもの、第三に同時代の作家やフィロゾフを批判するために用いられるもの、第四に、第三の意味を含めつつルソー自身の哲学的・文学的方法論を述べるためのもの、である。『エミール』の叙述は子供の発達・教育過程に沿って構成されているが、その議論は単線的なナラティブに還元できない複雑な内容をもっている。それゆえ、以下の分析においては、テキストにおける配列順ではなく上記の四

分類の順に従って、それぞれの典型的な用法に限定して引用することとする。

第一の種類のものとしては、第四編の名高い「サヴォワ助任司祭の信仰告白」以降青年期の教育を論じるために、それに先立って子供時代の教育と人間の認識機能の発展段階を要約している箇所に、次のような記述がある。

全てを抱擁し、世界に運動を与え、諸存在の全体系 (tout le système des êtres) を形成する、理解を超えた存在は、私達の手で見ることも手で触れることもできない⁽¹⁵⁾。

『エミール』の構成においては、人間は青年期にはじめて抽象的な観念や正義・徳といった道徳的判断の基準を身につけていく。ルソーの術語に従えば、自然に与えられた感覚器官に適した「事物の教育」から精神的・道徳的観念の発達にそった「人間と社会の教育」への移行期間である。ルソーは認識論においては徹底した感覚論者であり、「感覚」と「情念」を認知システムの根幹として考える。同時にルソーは抽象的な観念の実在性を否定しているわけではなく、例えば「神」や「世界」、「理性」や「正義」といった観念を分析的な悟性によって判断することの不可能性を主張するという意味での不可知論者である。それゆえルソーにとって高度に抽象的な観念は「良心」による直観的な認識の対象となる。このようなルソーの認識論を前提とすれば、第一の種類の体系概念は人間の認識を超えた自然世界の全体性を指示するために用いられていると解釈できるだろう⁽¹⁶⁾。

第二の種類の体系概念としては以下のような記述を挙げることができる。

この考察は重要であり、あらゆる社会 (système social) の矛盾を解明することに役立つ⁽¹⁷⁾。

système social という術語は18世紀の文脈を考慮すると解釈することの難しい表現である。société という単語が今日の「社会」に該当する意味と厳密には合致しておらず、自然法学派の議論に典型的に見られるように18世紀において société はギリシア・ローマ以来の「ポリス」「ソキエタス」の意味合いを強く含んでいる。ルソーも『人間不平等起源論』や『社会契約論』といった政治学的なテキストにおいては société に politique や civil という形容詞を重ねてその語義を補っている。すなわち société は自然法学派やデイドロ、ルソーら18世紀の思想家にとって、自然状態から脱出した人類が契約によって人為的に設立するものという意味をもつ言葉であった。société が今日の「システムとしての社会」という語義を単独ではもたない以上、ルソーの用いる système social も単に「社会」と訳すことのできる術語である。第一の種類の体系概念の意味内容に鑑みれば、ルソーが人間の構成するもう一つの「全体」として社会を捉えていたということは明らかである。

以上のようにある程度内包的意味をもつ体系概念の語法と比較して、第三の種類のそれはよりレトリカルかつ論争的な性質を帯びている。

このような企て [=教育] において、著作家というものは、自ら実践することを免れている体系 (le système) のうちに安んじながら守ることのできないありがたい教訓を安易に与え、詳細も実例もないがゆえに彼が実践できると言うことさえも、応用法を示していな

ければ使いものにならない、ということを私は知っている⁽¹⁸⁾。

18世紀のフランスは教育制度においても大きな転換点を迎えており、ロックの教育論をもとにした教育論が数多く書かれた。ルソーにとって彼ら著作家の教育論は、誤った人間観に基礎をもつ議論であった。それゆえルソーは『エミール』に『人間不平等起源論』以来の人間論・自然人論を盛り込んだ一つの総合的な作品として構想し、かつ教育の手引き——婦人による家庭教育のための——となるように書いたのである。したがって、ルソーが『エミール』における自身の立ち位置を明確にするために、百科全書派を筆頭とするフィロゾーフを常に頭に置いていたことは明らかである。『エミール』の教育論は周知の通り徹底して人間の発育過程という「自然の歩み」⁽¹⁹⁾に従った「消極教育」であり、感覚的世界の教育から抽象的観念による教育に進むよう構成されている。それゆえ、実践することを前提としない教育家の「体系」——例えば高度なレトリックを用いた「格言」や「原理」から構成されるような——は、抽象的である。ルソーにとっては「幾何学」、「歴史」と「教訓」による教育は青年期になるまでは有害ですらあり、まずは自然世界を解釈なくありのままに観察することが推奨され、同時代の歴史についてのディスクールも厳しく批判される。

哲学的精神がこの世紀の多くの作家の考察をこの方向〔歴史〕に向けさせた。しかし、彼らの仕事によって真理が獲得されたか私は疑っている。体系への熱狂 (la fureur des

systemes) が彼ら全てにとりいったので、誰も物事をありのままに (comme elles [les choses] sont) 見ようとせず、自分の体系と一致するように物事を見ている⁽²⁰⁾。

歴史もまた固有の展開法則が支配する領域である。ルソーは、ある特定の視点から叙述される歴史を事実よりも判断を強要するものととらえ、それゆえヘロドトスよりもトゥキディデースを評価するのである。ルソーはフィロゾーフたちの言説を、現象を原理に、事実を解釈に適合させるような体系的的精神として批判し、自らの方法論を自然に基礎づけられたものとして提示する。百科全書派を批判するルソーの筆致は、百科全書派それ自体、とりわけディドロの体系批判と完全に同型的な議論となっている。

私が皆よりも確信をもって語り、そうあることを許されている——そう信じているのだが——のは、私が体系の精神 (l'esprit de système) に自らを委ねず、出来る限り推論に頼らず、観察だけを信頼しているからである⁽²¹⁾。

前世紀までの哲学的・学問的方法を観察によらないものとして批判する精神を共有していながら、ルソーと百科全書派はその自然観察の方法論において決定的に異なっている。ダランベールーディドロの想定する実証主義は、ニュートンの力学的解析学よりはややライブニッツの微積分学に傾いた古典的解析学をモデルとする物理学である。それは解析学的操作によって、観察された現象を数学的原理へと還元していくのだが、原理はもはやデカルト主義の

ような最終的な真理とはなりえない。原理から命題を導出し体系を構成する過程においても、原理は絶えず修正の対象となる。正式な学校教育を一度として受けず、独学による初歩的な幾何学・算術の素養しかもたなかったルソーが、同時代にその胎動を始めた解析学革命の動向を正確に理解していたはずはないが、つねに自身の言説と実践的生の合致を求めるルソーにとって上記のような意味での実証的自然観は人間の幸福とかけ離れた「冷たい体系」である。自己産出する有機的全体である自然を直観と観照によって把握しようとするルソーは、彼ら百科全書派も同じく批判の対象としているのである。このような百科全書派の学問観・自然観と比較すれば、1762年のパリ高等法院による『エミール』『社会契約論』の発禁宣告に始まる亡命時代、いわゆる自伝の時代に連なるような意義深い次の一節も、百科全書派との思想的・方法的差異を明確に提示するために、独自性・単独者を過剰なまでに主張するルソーが採用した高度なレトリックとして理解することも容易になる。

読者よ、あなた達に語りかけている者〔＝ルソー〕が学者（un savant）でも哲学者（un philosophe）でもなく、党派のない、体系を持たない素朴な人間（un homme simple）であり、真理の友であることを絶えず思い出しなさい。人々とそれほど共に生きず、それゆえ人々の偏見に染まる機会も少なく、多くの時間を、人々と交流している時に感じることを反省する孤独者なのである⁽²²⁾。

頓呼法（apostrophe）、列挙法（énumération）、

対句法（antithèse）によって効果的に強調された「体系をもたない」という表現は、偏見と解釈に歪められていない自然を観照できる「孤独者」としてのルソー、すなわち『告白』『孤独な散歩者の夢想』によって決定的なものとなったルソー像を予告している。これが本稿が最も重要である考える第四の種類の体系概念の使用である。ルソーにとって自然は形而上学的原理ではなくそれ以上の還元が不可能な所与であった。それゆえ、『孤独な散歩者の夢想』に挿入されていても違和感のない自伝的なこの一節の後半を導く「体系」という言葉には積極的な意味内容が全くない。あくまで百科全書派のような「有害」な体系をもたない文学者としての自己像を描くための修辭的概念にとどまっているのである。

以上のように、認識論・倫理学・政治学理論をも含む1750年代末のルソーの思考が全面的に展開された『エミール』において、「体系」という語が多様な語義をもつこと、それが百科全書派に対するルソーの思想的独自性を提示する鍵概念であること、そして晩年の自己語りにつながる修辭的效果をも併せもつことが明らかになった。

4. 方法としての体系

『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く（Rousseau juge de Jean = Jacques）』というタイトルをもつ自伝的作品はルソー自身の呼称に倣って『対話』と呼ばれるのがルソー研究者の慣例である。「ルソー」と「フランス人」という架空の人物が「ジャン＝ジャック」について交わす対話形式を採用したこの作品は、『告白』の自己弁護が失敗に終わった孤独のなかで書かれた苛

烈な自己検討の書物である⁽²³⁾。『エミール』の出版が難航した1760年代初頭頃からルソーが迫害妄想に苛まれていたことは有名であるが、ルソーの名前を冠した架空の書物やルソーが監修していない海賊版の著作が数多く流通していたことは事実であり、『対話』を病跡学的な観点から解釈することは全面的に妥当であるとはいえない。むしろルソーの正しい「名前」や「言葉」が読み手に届きえない状況のなかで、いわば「真のエクリチュール」を奪還し直すための書物であると位置づけるべきである。実際に、ルソー自身を模した「ジャン＝ジャック」なる人物が全フランス的な「陰謀」により「悪徳な犯罪人」として歪められて理解されていることを出発点として真のルソー像を論証していくこの作品は、ジャン＝ジャックの著作の真偽を中心に展開されており、『エミール』や『社会契約論』といったルソーが現実に行った著作を「正しく」読むことが、まさに「ジャン＝ジャック」を「無害で素朴な自然人」として理解するための鍵なのである。それゆえ『対話』においてルソーは全作品を通して最も直接的に自身の「体系の一貫性」を主張しているといえよう。

対話の冒頭から「ルソー」は「フランス人」に「ジャン＝ジャック」の著作を先入見によらず読書からうける印象によってのみ判断するよう繰り返し薦める。

一人の誠実な人間に書かれ、別の名のもとに出版された人間の心についての真実の体系 (le vrai système du cœur humain) を読んで頂きたいのです⁽²⁴⁾。

「真実の」という修飾句によって、『エミール』

においてはまだ百科全書派との距離を指示するだけであった「体系」という語は、ルソー自身の著作活動を肯定的に描写する積極的な機能を与えられている。このような叙述によってルソーはまず自伝的な水準において自身の「心」が誠実であり決して悪人ではないことを反復する。『対話』は三部の対話によって構成されているが、「ルソー」に徐々に論駁されていく「フランス人」は第二対話と第三対話の幕間で「ジャン＝ジャック」の著作をもう一度読み直し次のように述べる。

これらの本を読んでみて、私がおその内容について騙されていたこと、美辞麗句で飾られてはいても支離滅裂で矛盾だらけの大げさな演説だと思い込まされていたものが、深く考え抜かれ真実ではないかもしれないが全く矛盾していない一貫した体系 (un système lié) を形成していることに気づくのにそれほど苦勞しませんでした。これらの書物の真の目的を判断するため、あちらこちらに切り離されて散らばっている幾つかの文のあら探しをすることだけにとらわれず、読んでいる最中にも読み終えた後にも自分自身に問いかけ、望みのとおりこれらの読書によって私がどのような心理状態に至り、留まるのかを調べてみたのです⁽²⁵⁾。

「第三対話」の序盤に置かれたこの「フランス人」の発言は多くの研究者に引用される名高い一節であり、様々な主題をめぐるルソーの矛盾した記述——たとえば言語の起源や女性観といった——を「一貫した体系」として整合的に解釈するための暗黙の根拠とされた文でもあ

る。ルソーは『学問芸術論』によるデビュー以来、つねに「思考の内容ではなく雄弁と美辞麗句によって読者を惑わしている」という批判にさらされ、またその著作の矛盾や断片的な書き方を指摘されていた。それゆえパリの文学界から離れたところで書かれたかのようなこの作品においてもルソーは自身のテキストの位置づけに過剰なまでに鋭敏である。反復の多い、唐突に挿入されたような断片的な書き方の向こうに、レトリックに還元されない体系的な思想が自分にあることを認めるようルソーは読み手に求める。それでは、この一節が示す「ルソーの一貫した体系」はどのようなものなのだろうか。

それまで私は彼の思考や格率のあるものは極めて逆説的で、またあるものはよく理解できないと考えていました。それらを整っていない、矛盾したものとさえ感じていたのです。私にとってはこれほどに新しい体系を確固として判断できるほどには、その著作の全体(l'ensemble)を把握していなかったのです。これらの本は今日の書物のように読者の精神がその一つ一つに安んじていられるようなばらばらな思想の寄せ集めではありません。それは孤独者の深い思索であり、わが国民の趣味にはあまりに相応しくない一貫した注意力を必要とします⁽²⁶⁾。

ルソーの体系は、「エクリチュールの寄せ集め」ではない、「孤独者の深い思索」による「著作の全体」である。しかしここにおいてもルソーは自身の体系の内実をまったく記述しない。あくまで体系はルソーの著作の信憑性、誠

実さの根拠として要請される「テキストの読み」と「解釈」の方法を指示する形式的な概念である。おそらく次の引用箇所がルソーの体系を最も具体的に記述した一節である。

最初の読書のときから、これらの著作はある種の順序を踏まえていて、内容のつながりをたどるためにはこの順序を発見する必要があると感じていました。この順序は刊行された順番を遡っていくもので、著者は原理から原理へと遡行し、最後の著作で初めて第一原理に到達していることがわかったように思われました。それゆえ、その思想を総合していくためにはこれら最後の著作から開始しなければならず、そのためまず彼が最後に出版した『エミール』に取り組んだのです⁽²⁷⁾。

『告白』と『孤独な散歩者の夢想』という今日最もよく知られた自伝テキストはルソーの死後に出版されたので、ルソーは『エミール』を代表作でありまた最後の出版作であると考えていた。ルソーによれば「ジャン＝ジャック」すなわちルソー自身の第一原理は「自然は人間を純粹で幸福なものとしてつくったが、社会が人間を墮落させる」という『学問芸術論』以来の命題である。ここまでの叙述を踏まえると、ルソーの体系は、百科全書派の体系から距離をとった孤独者ルソーの観照によって獲得された自然観を第一原理とする体系であること、そして次が本稿の重視する点であるが、『対話』におけるルソーの体系はなによりもまずテキストの「解釈の方法」を指示する文脈で用いられた概念である。確かにルソーは自身の思考が、空虚なレトリックに還元されない内実をもったも

のであると主張する。しかし厳密にテキストを解釈する限り、ルソーの「真実の体系」は肯定的に描写されているものの、その具体的な内容を読みとめることは難しい。むしろ、引用文を丁寧に読むと、ルソーが『エミール』、『社会契約論』といった「思想的」作品をも含めた著作の全体を自らの感情と誠実さの刻印された自伝的テキストとして位置づけており、その思考を「真実ではないかもしれない」とも述べていることから、ルソーの著作を領域に束縛された思想体系に還元せず多様な主題を横断的に論ずるテキストとして分析する出発点として『対話』における体系概念を積極的に位置づけるべきであろう。それは18世紀後半という転換点にあったフランスのより広範な「テキスト論的」文脈のなかでルソーの作品を考え直すことをも求める作業となるはずである。

[投稿受理日2016.4.23／掲載決定日2016.6.1]

注

- (1) Cassirer, E, 『ジャン＝ジャック・ルソー問題』, 生松敬三訳, みすず書房, 1997年, 99頁
- (2) 桑瀬章二郎「ルソーの「統一性」再考」『思想』, 1027号, 岩波書店, 2009年, 45-64頁
- (3) Cassirer, E, *The philosophy of the enlightenment*, translated by Fritz C. A. Koelln and James P. Pettegrove, Princeton University Press, 1951, p. vii, 『啓蒙主義の哲学上』, 中野好之訳, ちくま学芸文庫, 2003年, 12-13頁
- (4) Ibid., 27-28頁, p. viii - ix
- (5) *Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (以下ED), Pergamon Press, New York, 1969, t. I, p. 10, 『百科全書』, 桑原武夫編訳, 岩波文庫, 36頁。
- (6) Ibid., t. II, p. 1369, 184頁
- (7) Ibid., t. I, p. 18, 150頁
- (8) Ibid., t. II, p. 1369, 189頁
- (9) 1750年代前後のディドロの実証主義的傾向については, F. ベーコンとの関係を重視したものとしてヴェントゥーリの『百科全書の起源』, 大津真作訳, 法政大学出版局, 1979年の第4章が, ロックからの影響を重視したものとしてJ. ブルーストの古典的研究 *Diderot et l'encyclopédie*, Paris, 1962のp267-273が参考になる。また, ディドロの唯物論については森岡邦泰『深層のフランス啓蒙思想——ケネー ディドロ ドルバック ラ・メトリ コンドルセ——』, 晃洋書房, 2002年の第2章, 大橋完太郎『ディドロの唯物論: 群れと変容の哲学』, 法政大学出版局, 2011年を参照されたい。
- (10) ED, t. III, p. 681, 『百科全書』, 桑原武夫編訳, 岩波文庫, 191頁
- (11) ダランベールも「体系とは, 一般に原理と結論の集まり, またはつながりを言う。あるいは, 様々な部分が相互に結びつきあい, 一方が他方に連続するあるいは依存する, 理論の全体および統一 (le tout et l'ensemble d'une théorie) をいうこともある。(Ibid., t. III, p. 681, 197頁)」と述べている。また, *Dictionnaire de l'académie française*, 4th.ed, Paris, 1762においても système という言葉は命題や原理の関係づけられた集合として定義されている。
- (12) ED, t. III, p. 681, 『百科全書』, 桑原武夫編訳, 191-192頁
- (13) Ibid., p. 681, 195-196頁
- (14) ルソーが百科全書派, とりわけディドロと決定的に離別したのは, ダランベールの執筆した百科全書の項目「ジュネーブ」を批判した『演劇についてのダランベール氏への手紙』(1758年)の序文においてであることが知られる。『告白』のルソー自身の記述やこの時期の書簡によればルソーは同年の秋に『エミール』に本格的に取り組み始めた。『ルソー全集』, 白水社, 第六巻, 386-390頁の訳者樋口謹一による解説も参照されたい。
- (15) 以下, ルソーのテキストを引用する際は, シャンピオン社の最新の批判校訂版全集である *Œuvres complètes*, sous la direction de Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger, Genève, Slatkine/Paris, Champion, 2012を典拠として, OCと略記し巻数, 頁数を併記する。訳出するにあたっては白水社版『ルソー全集』の該当箇所を参照し, 適宜訳文を改め, 『全集』, 巻数, 頁数と併記する。OC, t. vii, p. 657, 六巻, 353頁
- (16) 「サヴォワ助任司祭の信仰告白」においてはこの意味で用いられる体系概念が頻出する。典型的な記述として, OC, t. viii, p. 679, 七巻, 24頁の箇所を

挙げることができる。

(17) *OC*, t. vii, p. 388, 六巻, 88頁

(18) *Ibid.*, p. 334, 38頁

(19) 序論においてルソーは『エミール』の教育論の「体系的な部分」を「自然の歩み」と呼び、それが「読者を最も当惑させ」、「必ず私を攻撃する理由にもなるだろう」と述べている。ルソーの観照的自然観に基礎をもつ『エミール』は「教育についての論文というよりも、むしろ教育についての幻視者の夢想」(*Ibid.*, p. 305, 14頁)として読まれるからである。

(20) *Ibid.*, p. 632, 329頁

(21) *Ibid.*, p. 655, 351頁

(22) *Ibid.*, p. 430, 129頁

(23) この作品が書かれた伝記的状况については、シャンピオン版全集の第三巻の巻頭に置かれた編者序文や、桑瀬による前掲論文が詳しい。

(24) *OC*, t. iii, p. 94, 三巻, 48頁

(25) *Ibid.*, p. 359, 289頁

(26) *Ibid.*, p. 361, 291頁

(27) *Ibid.*, p. 361-362, 292頁

参考文献

Cassirer, E, 『ジャン＝ジャック・ルソー問題』, 生松敬三訳, みすず書房, 1997年

——— *The philosophy of the enlightenment*, translated by Fritz C. A. Koelln and James P. Pettegrove, Princeton University Press, 1951 (『啓蒙主義の哲学上下』, 中野好之訳, ちくま学芸文庫, 2003年)

ダーントン, R 『猫の大虐殺』, 海保真夫・鷺見洋一訳, 岩波書店, 2007年

Derathè, R, *Jean-Jacques Rousseau et la science politique de son temps*, Paris, J. Vrin, 1970 (『ルソーとその時代の政治学』, 西島法友訳, 九州大学出版会, 一九八六年)

Hazard, P, *la crise de la conscience européenne: 1680-1715*, Paris, Boivin, 1935 (『ヨーロッパ精神の危機: 1680-1715』, 野沢協訳, 法政大学出版局, 1973年)

市川慎一 『百科全書派の世界』, 世界書院, 1995年

小宮彰 『ディドロとルソー 言語と《時》: 十八世紀思想の可能性』, 思文閣出版, 2009年

森岡邦泰 『深層のフランス啓蒙思想——ケネー ディドロ ドルバック ラ・メトリ コンドルセ——』, 晃洋書房, 2002年

Mornet, D, *Les origines intellectuelles de la révolution française (1715-1787)*, Paris, A. Colin, 1933 (『フランス革命の知的起源 上下』, 坂田太郎・山田九郎訳, 勁草書房, 1969, 1971年)

——— *la pensée française au X^{VIII} siècle*, Paris, A. Colin, 1926 (『十八世紀フランス思想——ヴォルテール, ディドロ, ルソー——』, 市川慎一・遠藤真人訳, 大修館書店, 1990年)

中川久定 『啓蒙の世紀の光のもとで——ディドロと『百科全書』——』, 岩波書店, 1994年

大橋完太郎 『ディドロの唯物論: 群れと変容の哲学』, 法政大学出版局, 2011年

Proust, J 『百科全書』, 平岡昇・市川慎一訳, 岩波書店, 1979年

——— *Diderot et l'encyclopédie*, Paris, A. Colin, 1962

リーデル, M 『市民社会の概念史』, 河上倫逸・常俊宗三郎訳, 以文社, 1990年

Rousseau, Jean-Jacques, 『ルソー全集』, 白水社, 1979-1985年

——— *Œuvres complètes, sous la direction de Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger*, Genève, Slatkine/Paris, Champion, 2012

Starobinski, J, *Jean-Jacques Rousseau: la transparence et l'obstacle*, Paris, Gallimard, 1971 (『ルソー 透明と障害』, 山路昭訳, みすず書房, 一九九三年)

寺田元一 『編集知の世紀: 十八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』, 日本評論社, 2003年

ヴェントゥーリ, F 『百科全書の起源』, 大津真作訳, 法政大学出版局, 1979年